



命のバトン

墨田区立両国中学校 3年 中島 瑠羽

「……」テレビに釘付けになりながら思わず息をのんでしまつた。それは私にとつてとても衝撃的な内容だったから。

「私、赤ちゃんを産むね。」

母との喧嘩の後でシーンとした気まずい空気の間聞こえてきた。父子家庭の特集で奥さんは亡くなつたらしい。子供を産んだら奥さんが死んでしまうと医師から宣告を受けたが、子供を産むという選択肢をとつたのだと。私はこれを見て、子供はいつでもつくる事が出来るのに、なぜもうつくることの出来ない自分を死なせる選択をしたのか。子供の私には理解出来なかつた。子供が大切とはいえ、自ら死を選ぶのは辛いはずだし、お父さんだつて最愛の妻を失うのは失つた後のことも考えると辛くて辛くてしかたないはずなのに。「なんで」つい声に出してしまつた。母とは喧嘩しているのに、気まずい。すると母は、

「ママもこの状況だつたら産むよ。もう十分生きだし、赤ちゃんがお腹にいる間は顔も見れないし一緒にいる期間は短いけど、やっぱり自分の子は大切なんだよ。命はバトンなんだよ。」私はこの言葉を聞いて納得した。私は昔から今まで変わらない量の愛をもらつて育つてきた。それは私がお腹にいるときから変わらずあり続けたんだなと。

「産まれてきたくなかつた。」

こんなことを言つてしまつた自分が恥ずかしい。世の中には自分の死を選んでまで子を産む母がいるのに。私の母が同じ状況でも私を選んでくれると思う。命のバトン、かつこよく聞こえるのに、すごく重い言葉だと実感した。

特集が終わり、ソファから立ち上がり台所へ向かつて食器を洗つた。

「ごめんね。」

水の音で聞こえているか分からない。返事は返つてこない。次の日学校から帰ると、私の大好きなアイスが冷凍庫の中に入つていた。付箋と一緒に。

「いいよ」

(審査評) 子供を産めば自分の命が危ういという中で、出産を決断し亡くなった母親のことを伝えるテレビ番組を見て、思いがけなく自分の母からも、「ママもこの状況だつたら産むよ」との言葉を聞く作者。あらためて作者は、自らの命よりも子供の命の方を大切に思う母親の愛情の深さと、子供を産むということの重さを知ることになる。母とのケンカ、テレビ番組の内容、予想しなかつた母の言葉、感動して悔いる作者、母との和解という、「命のバトン」の重さを伝える重層なプロットが展開し、作者の文章構成能力の高さを感じさせる優れた作品である。

佐藤典司